

平成 28 年 度 学 校 自 己 評 価 報 告 書

学校教育目標		○勤労と勉学に励み、真理と平和を愛し、実践力のある人間を育成する。 ○豊かな知性と情操を養い、心身ともに健康で、調和のとれた人間を育成する。 ○広い世界観に立ち、親和協調の気風を養い、豊かな社会の建設に貢献しうる人間を育成する。				
本年度の重点目標		□生徒の基本的生活習慣の定着を支援するとともに、生徒の社会性の涵養に努める。 □授業改善に向けての取組を継続し、生徒の基礎・基本の学力の定着に努める。 □各年団におけるキャリア教育の充実を図り、生徒の進路意識の高揚と進路実現に努める。 □生徒理解と情報共有を進め、生徒の居場所・安心な学びの場づくりに努める。				
重点項目	短期経営目標	具体的な計画	評価項目	達成状況	評定	改善方策
1 教務課	(1)授業改善の組織的取組を継続し、基礎学力の向上を図るとともに、より高いレベルの学力の育成を目指す。	①授業力向上プロジェクト委員会と連携して教員研修を充実させるとともに、具体的にどのような視点で授業改善を進めるべきかを各教員に提示する。 ②学び直し教科「若竹」を更に充実発展させる。特に日常生活分野においては、アクティブラーニングを意識した取組を進める。	①②授業に関するアンケート（生徒用・教員用）を7月と12月に実施し、成果を評価する。その際、若竹・漢字学習に関する項目を今年から加える。	①今年度の授業アンケートでは「集中しやすい雰囲気」が多くのクラスで下がる傾向があった。一方、「若竹」に対する評価は好評価と言える。つまり、授業改善に向けて教員は努力をしたが、クラスによっては授業規律を保てない場合があった。 一方「漢字」はクラスによって差が見られ、2年も3年も3修よりも4修生の方が自己評価が低い。 ②学校評価アンケートによれば、多くの教員が「考えさせる授業」に取り組んでいる。生徒の方も一定の評価をしていると言える。	B	①特に、漢字学習について改善すべきことがある。現行の方法では、漢字学習を宿題として取り組む必要があるため、家庭学習の習慣の無い生徒には取り組むのが難しい面がある。また、学習した漢字の一部は国語科のテストに出題されるとはいうものの、単位認定等には関係がないため、学習に対する動機付けが弱くなりやすい。これらについての改善を教務課・国語科で検討していきたい。
	(2)評価方法等の周知を継続し、目標に向かって努力する生徒を育て、未履修・未修得のさらなる減少に努める。	①入学予定者説明会・新入生オリエンテーション・各授業における説明・通知表送付・年団通信、教務主任の個別指導など、さまざまな機会を捉えて評価方法を周知し、前向きな努力を促す。その際、未履修・未修得の基準だけではなく、5段階評価の意味についても説明をする。	①未履修・未修得者数の減少。 *未履修・未修得科目を持つ1年/2年/3・4年 25年度末 24名/9名/6名 26年度末 26名/19名/8名 27年度末 12名/10名/7名 *評点による未修得科目の延べ数 25年度末 57科目 26年度末 89科目 27年度末 35科目	①今年度は昨年度に比べて未履修・未修得者の数が増えそうであるが、それは退学・転学・休学者が少ないことも関係がある。 2学期末までの退学・転学・休学者数は次の通りである。 28年度6(4)←27年度13(8) ←26年度16(12)←25年度24(13) ()は1年生の内数	A	①取り組みとしては前年通りであるが、生徒の中には評価方法を十分に理解していない生徒もいることは確かである。出席者の多い時期を狙って、教科担任が具体的に説明をするようにしたい。
2 生徒課	(1)生徒の基本的生活習慣が定着し、社会性を身につけることができるよう支援する。	①クラスごとの遅刻総数の数値を一覧にし、見える化を図るとともに、遅刻回数が多い生徒の家庭に定期的に連絡をすることで業間遅刻の減少に取り組む。	①遅刻総数の減少 昨年度：5,027回 一昨年度：4,773回 ①②③学校評価アンケート結果 《基本的生活習慣の定着》 教員保護者生徒 昨年度：1.4 1.1 0.8 一昨年度：1.1 1.2 0.7	①遅刻回数は、今年度は4,363回、昨年度は4,373回（12月末現在）とほぼ同数で推移した。業間遅刻については1学期651回、2学期452回と減少傾向にある。三者懇談や面談等で「入室許可証」を見せて指導した。 ※学校評価アンケート結果は今年度、教員1.4保護者1.1生徒0.7とほぼ昨年度と同じであった。		①遅刻をすることへの罪悪感が希薄である。年度当初に目標を立たせるなどの啓発活動や家庭に強く協力を訴える必要がある。

	<p>②教員による駅前での指導や玄関前での生徒会等の「あいさつ運動」を推進する。</p> <p>③頭髪(帰って直してくる指導)やピアス(預り指導)に関する指導に取り組む。</p>		<p>②「あいさつ運動」は委員会を中心に計画的に実施しているが、参加生徒の少ない委員会もあった。</p> <p>③ピアスの指導は一定の成果が見られ、校内で見かけることはほとんど無くなった。頭髪指導は学期始めに一斉に実施しており、各年団を中心に指導できている。</p>	A	<p>②教職員から積極的にあいさつをする雰囲気づくりが急務である。また、掲示板を使つての啓発活動や授業・HRでのあいさつの徹底が必要である。</p> <p>③入学当初に頭髪やピアスについて強力に注意する。また、年度当初にも集会やHRで校則について指導、保護者へも文書で通知するなどして徹底する必要が有る。</p>
2 生徒課	<p>(2)生徒が学校行事や部活動・委員会活動に積極的に参加し、自主的に活動できるよう支援する。</p> <p>①部活動の活性化と入部者数の増加に取り組む。</p> <p>②活動計画・委員会目標掲示等により、委員会活動の推進を目指す。</p> <p>③生徒会による自主的活動の活性化に取り組む。</p> <p>④ボランティア活動への積極的な参加を推進する。</p>	<p>①入部者数の増加(昨年：71名)で評価する。</p> <p>①②③学校評価アンケート結果で評価する。 《学校行事・生徒会活動・部活動に積極的に参加》 教員保護者生徒 昨年度：1.5 1.1 0.8 一昨年度：1.1 1.0 0.5</p> <p>④年間ボランティア参加者数(昨年度：73)と学校評価アンケートで評価する。 《ボランティア活動積極的に参加》 教員保護者生徒 昨年度：1.3 1.1 0.9 一昨年度：0.9 1.1 0.6</p>	<p>① 今年度の部員数は74名。一部の生徒は複数の部を掛け持ちし積極的に活動している。今年度も全国大会へソフトテニス・バドミントン・卓球・陸上競技の4つの部が出場した。特に、男子ソフトテニス個人では全国3位に入った。</p> <p>※学校評価アンケート結果は、今年度は教員 1.2 保護者 1.1 生徒 0.5と教員・生徒の評価がやや下がった。</p> <p>②図書や保健など一部の委員会は活発に取り組んだが、全体としては、年度当初に立てた活動計画・目標通りにはなかなか取り組むことができなかった。</p> <p>③今年度も体育祭や文化祭をはじめ清掃活動・花の苗贈呈などの行事に積極的に取り組み、玉島警察署管内の善行少年表彰や倉敷市のよい子強い子表彰を受賞した。</p> <p>④学校評価アンケート結果では、今年度、教員 0.8 保護者 0.9 生徒 0.6とやや下がってしまった。また、清掃ボランティアの参加者は夏・冬合わせて68名と若干減少した。一部の生徒ではあるが、祭りやイベントに積極的に参加するなど、地域からも好意的に受け止められている。</p>	B	<p>①入部の勧誘や啓発活動に力を入れるとともに、試合結果や活動状況を定期的に発信する。また、進路等と関連づけて部活動の意義を訴え、活性化を推進する。</p> <p>②定期的に委員会を開くなどして取組状況の把握と推進を促す必要がある。</p> <p>③生徒会活動自体は真面目に取り組んでいるが、もっと他の生徒を巻き込んだ取組になるようPR活動や積極的な呼びかけをして、様々な行事に多くの生徒が参加するよう努力が必要である。</p> <p>④ボランティア活動予定表など定期的に教室掲示し、啓発活動をする必要がある。また、ボランティアの意義や必要性をHRなどで説明し、積極的な参加を促すことが大切である。</p>

3 進路課	<p>(1)1 年次から計画的に進路課と年団が主体となりキャリア教育を実践し、生徒の進路意識の向上を目指す。</p>	<p>①生徒の実態に合った進路行事の計画と実施、進路の手引きを利用した系統立てた進路LHRを実践する。</p> <p>②年3回進路希望調査を実施し、必要に応じて進路相談・アドバイスを行う。</p>	<p>①進路行事実施後のアンケート調査を実施し、満足度をグラフにて評価する。</p> <p>学校評価アンケートの結果 (LHRの取組：昨年教員 1.3、保護者 1.1、生徒 0.8)</p> <p>②進路希望調査の結果の推移による進路意識の向上をグラフにて評価する。</p>	<p>①在校学年の進路講演会については、コトによるもので 78%の生徒が参考になったと回答。一方で、昨年と同じ内容になったことで上級生の評価は低かった。</p> <p>学校評価アンケートの結果(教員 1.3、保護者 1.0、生徒 0.8)とほぼ昨年と同等の結果であった。</p> <p>②未定と回答した生徒 (1 学期：全校生徒、2・3 学期：1・2・3A 対象) 1 学期・・32.6% 2 学期・・27.4% 3 学期・・26.7% わずかではあるが、未定の割合が減少した。</p>	A	<p>①進路LHRの意義を生徒に理解させ、引き続き、系統立てた進路LHRを実践するとともに、より効果的な進路行事の計画と業者の選定を検討する。</p> <p>②調査は今後も継続していきたい。進路意識を高めることで、学校生活がより充実できるよう進路指導を続けていきたい。</p>
	<p>(2)生徒の自己実現を可能にする指導法等を研究・実践し、進路指導体制を充実させ、生徒の進路実現に努める。</p>	<p>①進路課・年団が生徒情報・進路情報を共有し、年団会議・LHRを通して学校全体・教員全員での進路指導を実践する。</p> <p>②進路課による卒業年団の生徒面接を実施し、個々の生徒の実態に合った進路指導を実践する。</p>	<p>①学校評価アンケートの結果(学校が行う進路指導：昨年教員 1.5、保護者 1.3、生徒 0.9)</p> <p>②過去3年分の進路未決定者 25年 13/51(25.5%) 26年 8/48(16.7%) 27年 8/42(19.0%)</p>	<p>①就職・進学試験の面接練習において全教員で面接指導に当たり、生徒側の意識にも大きな変化があり、効果があった。</p> <p>学校評価アンケートの結果(学校が行う進路指導：教員 1.7、保護者 1.1、生徒 0.8)と教員側の意識は向上している。</p> <p>②進路課長による個々の生徒との面談を実施し個々の生徒の進路指導に役立った。 28年度進路未決定者 (1月末) 12/47 (25.5%) 引き続き指導中である。</p>	A	<p>①進路指導は今年度同様の指導を実践することで、成果は上がっていくと考えられる。一方で、学校の様子が家庭に伝わりにくい状況にあるように思われるが、進路通信による発信や、ホームページへ行事の様子を掲載することで、学校の取組が理解してもらえるように努力をしていきたい。</p> <p>②アルバイトに専念する生徒や卒業だけを目指す生徒が数名いる。ハローワークと連携をして、卒業決定後の指導についても継続していくが、進路意識をもっと高め、早い段階から取り組めるよう指導する必要がある。</p>
4 厚生課	<p>(1) 生徒・保護者への健康・安全に関する知識の啓発活動に努めるとともに、疾病治療率の向上を図る。</p>	<p>①健康・安全に関して生徒や学校の実態に即した情報の提供を印刷物や電子媒体によって行い、健康・安全に対する知識の啓発に取り組む。</p> <p>②生徒の心身の健康状態を的確に把握し、疾病治療の必要性を個に応じて面談や各種媒体によって知らせる。</p>	<p>①学校評価アンケートの結果(健康の増進と安全保持：昨年教員 1.4、保護者 1.2、生徒 0.9)</p> <p>②疾病治療率 (昨年：眼科 38.2%、歯科 11.6%)</p>	<p>①保健だよりの月1回の発行に加え、eこねつと及びHPにより検診や疾病治療等に関する情報を計5回発信した。</p> <p>学校評価アンケート結果は、昨年と比較し教員-0.2、保護者+0.1、生徒は増減なし。</p> <p>②身体計測及び各種検診を計画的に実施した。その結果を保護者に通知後、三者面談等を通じて本人と保護者に検診の結果を説明し、検査・治療が必要な者には医療機関での受診を勧奨した結果、治療率が眼科 40%、歯科 21.6%とともに増加した。</p>	B	<p>①生徒を介さず直接情報を保護者に届けられる電子媒体による方法は特に保護者には有効であると思うので紙媒体によるものとともに継続する。</p> <p>②眼科は、アレルギー等一過性の症状も多いので、歯科に比べ治療率があまり向上しなかったのではないかと。眼科に関する情報の提供量を増やすなどの工夫をする。</p>

4 厚生課	(2) 特別支援を必要とする生徒の理解と情報共有に取組み、落ち着いた学びの場づくりに努める。	①各課・年団・教科担任等と連携して個別支援に係る情報の収集に努め必要に応じて適切に個別支援計画を作成する。 ②ユニバーサルデザインに立脚した教室の整備に引き続き取組み、学習しやすい環境作りを行う。	①個別支援に係る情報収集及び個別支援計画作成の実態と学校評価アンケートの結果 (モデル事業の成果の継承：昨年 1.5) ②学校評価アンケートの結果(教室整備：昨年生徒 0.6)	①1年生に個別支援に係るアンケート調査を入学時に実施すると共に、本年度から新たに三者面談を利用して聞き取り調査を行った。また、教科担任等と連携して生徒の気になる言動等の情報を収集し、個別支援計画を作成した。学校評価アンケートは、「授業展開においてユニバーサルデザインの考え方がいかされている。」という項目において、1.1であった。 ②学校評価アンケート結果は、昨年と比較して生徒が 0.1 教員が 0.2 低下した。	B ①アンケートのポイントが低下していたので、個別支援の意義や重要性等を職員間で継続的に確認していく。 ②モデル事業の実施年から時間が経過してきたので、職員の意識が低下しないようユニバーサルデザインの有効性等を確認し、教室環境整備を実態に即して見直す。
	(1)保護者との連携・協力を軸に、生徒が学校・授業中心の生活を送れるよう、安心な学びの場づくりに努める。	(1年団) 保護者との連絡を密にし、生徒面談の回数を増やして改善を図る。 (2年団) 日頃、年団で行っている情報交換の内容を、週ごとに年団で整理し、改善を図る。 (3・4年団) 各教科と連携を図り、提出状況を確認し担任から注意する。	(1年団, 2年団, 3・4年団) 学校評価アンケートの結果を活用する。	(1年団、2年団、3・4年団) 各学年とも、面談週間の面談に加え、気になる生徒に必要なに応じて面談を行った。不登校の生徒に対しても、定期的に家庭訪問をしたり、電話連絡を行った。また、年団主任会において、情報交換を行い、生徒指導に役立てることができた。学校評価アンケート結果によると、「クラスづくり」については教員・保護者は約8割が、あてはまると回答しており、生徒も約7割はあてはまると回答している。	B (1年団、2年団、3・4年団) 生徒のわずかな変化にも気がつけるよう、日常的に声かけをしたり、面談を増やしたりする。生徒の話にしっかり耳を傾け、生徒の様子や状態を年団教員を主に、全教員で共有する。保護者への連絡を継続し、良好な関係作りに努める。
5 年団	(2)教職員間で生徒情報や指導方法を共有し、生徒の進路意識の高揚と進路実現に向けた指導の充実に努める。	(1年団, 2年団) 進路希望調査などの生徒情報を共有し、担任面談や進路講演会を通して生徒の進路意識を高めるよう指導する。 (3・4年団) 生徒の進路保障をはかるべく、進路課と連携して面接試験対策を充実させるために、個に応じた進路指導を実施する。	(1年団, 2年団) 講演会後のアンケートや学校評価アンケートの結果を活用する。 (3・4年団) 進路のミスマッチをなくし、就職率、進学率を向上させる。(昨年卒業生 42名：就職者 23名、進学者 11名、残り8名は独自の進路)	(1年団、2年団) 3回進路希望調査を実施。さらに進路講演会・面談の実施により、将来の進路について考える機会を作った。また、進路 LHR を通して自己理解を進め、自分の希望・適性等を探る機会を持った。学校評価アンケートでは、約8割の生徒が進路学習の充実を実感している。 (3・4年団) 進学率は昨年より高くなったが、就職率は低くなった。(今年度卒業生 47名：就職者 19名、進学者 16名、残りの12名は今後も進路決定のため、支援を続ける。(2/2現在)	B (1年団、2年団) 進路講演会・進路 LHR・進路希望調査等の継続。日常生活や授業・面談の中で進路意識の高揚につながる声かけと情報提供をする。 (3・4年団) アルバイト優先の生徒や卒業することだけに学校生活を送る生徒への進路意識を持たせる。障害者手帳を持つ生徒について、進路課と連携して、年度初めからの対応を進める。

6 学校運営	<p>(1)「真備陵南生の自己有用感を育む」取組(Mabiryounan Valued Personarity)」の体系化と定着を推進する。</p>	<p>①自己有用感を育む6つの「る」＝「認める、信じる、ほめる、しかる、体験させる、考えさせる」の取組を実践する。</p> <p>②地域との連携や異世代交流の振り返りを行いフィードバックシステムの定着を図る。</p>	<p>①②自己有用感に関する学校評価アンケート項目を新設して達成状況を把握する。</p>	<p>①教職員のMVPへの意識が浸透し、生徒の自己有用感を育む取組が前進した。特に校内掲示板の設置と活用により、生徒の活躍や身の周りに対する感謝の心が見える化したことで、肯定的な自己評価が向上した。 (自分は役に立つ人間) 7月：-0.5、12月：0.1 (33%) (53%)</p> <p>②地域の幼稚園や小学校との交流、さらには福祉施設の訪問などを通じて異世代と交流し、地域にも貢献できた。</p>	B	<p>①自己有用感を育む取組で、次年度は生徒への定着をさらに推進していくための手立てを提案したい。</p> <p>②事後アンケートの実施や課題の共有などフィードバックシステムが不十分だったので、次年度は取組の成果をその都度確認できるよう工夫したい。</p>
	<p>(2)情報の「見える化」とコミュニケーションの場づくりを工夫し、教職員のやりがいのある職場づくりを推進する。</p>	<p>①校内ルールや校内研修計画等の「見える化」を推進する。</p> <p>②教職員間のコミュニケーションの場づくりをすすめ、風通しのよい職場づくりと人材育成に取り組む。</p>	<p>①②学校評価アンケート結果状況。(協働体制づくりが進んでいる。教員：昨年度1.2ポイント)やりがいについてアンケート項目を新設し達成状況を把握する。</p>	<p>①校内ルールをA4版2枚にまとめ「見える化」を行った。また、「報連相」を意識した情報交換が広がっており、協働体制も定着しつつある。(協働体制づくりが進んでいる) 昨年度1.2 今年度1.2</p> <p>②やりがいのある職場であるかについてアンケートを新設した。ポイントは1.4であった。内訳は、「よくあてはまる」が53%、「ややあてはまる」が43%であった。</p>	A	<p>①②一部の教職員に負担がかからないよう組織で対応しているが、時に生徒指導や保護者対応で負担感を感じている教職員もいるので連携できるチームづくりをすすめていきたい。</p>